鷲峰

十　月　号
第4卷　第5号
通卷第30号

目次 ―――――――― 十月号 ――

巻頭の言葉
奇蹟に対する仏教徒の態度 …… 4
身延山三門二王尊の霊威 …… 分銅志静 6
かねて大マンダラ二個の梵字について
煩悩は消えない …… 秋元忠 21
信仰相談室
何故続経唱題をくりかえすのか …… 日高白象 24
美女と求道者 …… 仲頴隆 30
或る縮図 …… 渡辺暁象 29
台風見舞 …… 23
編集後記 …… 33

表紙題字――身延山法主藤井日静猊下
表紙写真――印度霊鷲山へ渡つた身延山金銅の釈尊像

仏教徒の態度

弘安五年（旧歴）十月十三日の午前八時頃、晩秋の朝もやにつゝまれていた武州池上の森に、木立をわけて輝しい朝の光が射し入りました。時に大地は六種に震動し、庭前の桜の枝には時ならぬ花が開きました。それは不世出の聖者日蓮大聖人の御入滅をつげる天地の奇瑞でした。爾来日蓮門下の人々は、御会式といえば必ずといつてよいほど、時の桜花に擬する万灯をかゝげて御臨滅の往時を偲ぶことをならわしとしています。思えば大聖人の御生涯は、臨滅度時に限らず奇瑞・奇蹟にみちみちています。法難の色まさるごとに奇蹟も強く現われています。大聖人の御伝記を物語る者にして、その奇蹟をたゝえない者はありません。然し奇蹟をたゝえることが、果して大聖人をたゝえることなのでしょうか。

大聖釈迦牟尼世尊の御入滅は、クシナガラ城外、沙羅樹の林の中でした。時に大地は六種に震動し、沙羅樹は技ごとに万朶の花を開き、臨滅の林は時ならぬ白い花びらにおゝわれました。虚空には天の鼓が聞え、天上よりはマンダラ華がふつて来ました。この時、世尊は仏弟子たちに対して次のように諭されています。

「たとえ、如何なる奇瑞や奇蹟が起ろうとも、それが仏陀をたゝえることにはならない。まことに仏陀をたゝえるものがあるとするな

奇蹟に対する

らば、それは仏陀の正法をわきまえ、これを如説にたもつて実践することである。それ以外にない」

何と明解な教えであることでしよう。世尊は御入滅のまぎわ、眼前に起つた天地の奇瑞を指さしながら、このように仏弟子たちをいましめられたのでした。

思うに宗教には必ず霊験、奇蹟というものが附随するものです。宗教が神霊との交流にある以上、そういうものが起るのも当然なことではありましよう。然しそれらはあくまでも信仰の功徳、結果であつて、期待したり欣求すべきものではないのです。むしろ仏陀の正法を如説に受持実践宣布すること自体が既に、他の如何なる霊験奇蹟にも勝る末法の世の奇蹟的行法ではないでしようか。

大聖人一代六十一年における重畳たる法難の中に色どられた奇蹟の数々をたゝえることよりも、その生涯をつらぬき末法万年にかけた心底の悲願を偲ぶべきでありましよう。仏祖は奇蹟を現わすために世に出現されたのではありません。地上のすべての人々をして仏知見を開かしめ、仏知見を悟らしめ、仏知見の道に入らしめ、これを実践せしめんがための故に、という一大事の因縁をもつて世に出現されたのです。

身延山三門二王尊の霊威

かねて大曼荼羅の梵字について

分銅志静

日高師とは立正大学の同級で、予科時代は影身のように行動を共にした莫逆のなかである。あうごとに、「鷲峰」に何か書け、とさいそくされるが、雑事に追われ、なか〳〵約束がはたせなかつた。

先月の十五日、身延山の鎮守正八幡のご祭例の日にゆくりなくも祖山へ立ちより、三ケ月ぶりで日高師にあつた。日高師は前夜九州の布教から、かえつたばかりであつたが、故郷の福智山で「誓願の滝」を開き、その景勝の地に将来本化の青年道場をつくる計画などを話してくれた。

半日はまたたくまにすぎ、私の帰りの時間が迫つたので、二人で竹之坊を出て、三門に立ちよつた。私はいつもこの二王門でお曼荼羅やお守りを求めることにしている。お曼ダ羅を三本求めると、一本足りず、番僧が恵善坊までそれをとりに行つた。その間、私はふとこの三門の仁王尊の霊験について日高師にかたつた

日高師は言下にそれを「鷲峰」にかけという。私もそうしようかと思わず誘いこまれてしまつた。私は以

<尊王二の門三延山身い晴素>

前からこの二王尊を深く信仰し、朝夕の勤行には必ず勧請し、これまで幾度となく甚深のご守護をいただいているので、いつかその一端をかいてみたいと思つていた。

普通お二王様といえば、何宗を問わず、寺門の左右に、筋骨隆々の姿で立ちはだかり、悪者は通りやせんと大きな目玉でにらみつけ、神様というよりは、こわい門番といつた感じに受けとられ、あまり信仰の対象にはなつていないようである。たいていの信者はお二王様にはふりむきもせず素通りしてしまう。

しかし釈尊にとつては、この二王尊こそは義経の弁慶以上になくてはならない大事な守護神である。大聖人は日蓮当身の大事と称された観心本尊鈔の正宗文、此より堅固に秘せの段に

「教主釈尊は三惑已断の仏なり、又十方世界の国主、一切の菩薩、二乗、人天等の主君なり。みゆきの時は梵天左に在り、帝釈右にはべり、四衆八部後に従ひ、

金剛前を導き、八万法蔵を演説して、一切衆生を得脱せしむ」

とお説きになつている。「金剛前を導き」ということは金剛力士つまり二王尊が先導して、一切の邪悪をはらい、釈尊のご説法の先触れをされるということである。この二王尊の守護がなければ、釈尊は心安くご説法が出来ないということになる。ただこの金剛力士は釈尊から、かくれて守護するようにと密事を托されているので、大衆の前にはめったに姿をあらわさないつねに霊界にあつて活動されているわけである。

大宝積経には、

「是に於て金剛力士名を密迹と言ふ。世尊の右に住し手に金剛を執る」

とあり、金剛力士はつねに釈尊の右側にはべつて、釈尊の言いつけがあれば、いつでも行動をおこせるように気をくばつていられる。しかしわれ〳〵のような凡人には、その護衛の姿が見えないのである。

さて、この二王尊のお名前であるが、梵名はバジャラパーニ、訳して執金剛神、あるいは金剛手、私は南無密釈金剛大力神と申し上げる。釈尊の秘密の依託を受けてはたらくので、とくに密釈をふしてお呼びするまた大力神と申しあげるのは、大象の百万倍の那羅延力を持つていられるからである。そのため那羅延金剛と呼ばれることもある。人によつては二王のうち、右がわの口を開いた阿形のお姿を那羅延金剛大力神と呼び、左がわの口をとじた吽形のお姿を密釈金剛大力神と呼ぶ。恵善坊から出されている古い版木のものにもそのようにしるされている。

しかし二王といつても、本来は大聖人が示されたように金剛神は一体である。法華経の結経である普賢菩薩行法品にも、

「象の頭の上に一人の金剛人有りて、金剛杵を以て遍く六根を擬す」

とある。その本地はすなわち一体とみるべきである

しかし現実に活動する時は陰陽に別れ、あたかも兄弟のように阿・吽の二神となつて力を発揮する。阿は水であり陰をあらわし、一切を生み出す母である。吽は燃える火であり、陽をあらはす。吽は声なき声、威猛大勢の音と言われる。この陰陽のはたらきによつて一切の万物は生成発展する。つまり秘密神通の力をあらわしたものである。

一寸余談になるが、「鷲峰」の前号に日高師が本尊論を展開し、大曼ダ羅の左右二個の梵字は不動明王・愛染明王の種子をあらわしたものでなく、法体とみるべきであろう、という意味のことをのべ、詳細は後日にゆずつているが、このことは二王尊にも重要な関連があるので、いささか私の卑見をのべたいと思う。

昭和三十八年の九月、祖山へ団参した折、立正時代の恩師である岩間湛良布教部長を囲んで、日高師、舟山三朗氏、小生、その他二三人と教学について語り合つたことがあつた。

その時、私から大曼ダ羅の二個の梵字が不動、愛染の種子ということは、大聖人の教学の大綱からみてどうしてもおかしい。不動、愛染は大聖人が亡国の邪教として破折された真言の祈禱本尊であり、それが法華経の大曼ダ羅に梵字として大書されるいわれがない。首題と二仏四士のみあらわした略式の曼ダ羅の場合でも、この二個の梵字だけは略されていない。文珠普賢や四天王よりも、この不動、愛染が大事だということはどうしても考えられない。これには何かわけがある

こんな話から、この二個の梵字を不動、愛染とみなしている建治三年の日女御前御返事の真偽問題にまで話がすすんだ。勿論、私は日女書の偽書であることを主張した。祖書学の権威である浅井要麟師は「日蓮聖人教学の研究」の二七八頁で日女書をとりあげ、大島仲太郎氏の本尊梵字考や、執行師の五種頓修の疑義などを援証して、この書の成立を疑い、第一文献として

採用することの不可なることをのべている。偽書の中にも二通りあつて、三大秘法鈔のように大聖人のご文章によく似せて、容易に判定のつかないものと、すぐそれとわかるような悪文のものがある。日女書は後者のさいたるものである。このにせもの中に、大曼ダ羅の説明の個所があり、

「不動愛染は南北の二方に陳を取り」

という問題の怪文字が出てくる。これが二個の梵字に比定され、本宗では大曼ダ羅を仏像化する場合、不動、愛染の不気味な姿を須弥壇の左右にはべらせるわけである。祖山の仏殿の本尊様式もその一事例である今日、本宗の大寺・小寺を問わず、その大半が不動、愛染を造立する大謗法のみなもとは、実はこの日女書の十五字にことはじまるのである。

大聖人は建治元年の「神国王御書」（御真蹟は妙顕寺にある）の中で、十五壇の秘法である尊勝陀羅尼不動明王法、如法愛染明王法を否定し、これらの真言の秘法を用いれば、かえつて破国亡国をまねくと説かれている。また同じ頃に書かれた「清澄寺大衆中」（真蹟は明治八年に身延山で焼失）には、

「日本国の法華経の正義を失つて、一人もなく人の悪道におつる事は、真言宗が影の身にしたがうが如く、山々寺々ごとに法華経に真言宗をあひ副え、如法の法華経に十八道（真言秘法）を副え……　王法の尽きなんとする是なり、此の悪真言鎌倉に来りて又日本国を亡さんとす」

と三国の正法をくいちらした真言のおそろしさをいましめている。

今日の仏教学では、その真言宗は正統の仏教とはみとめられていない。この宗はあきらかに印度在来の婆羅門教の出生であり、仏教とは異質のものである。しかるに大聖人はすでに七百年前にその正体を見破つていたのである。「三三蔵祈雨の事」（真蹟大石寺）に

「大なる僻事の、彼の法（真言）の中にまじはれるな

るべし」

と糾弾されている。それにもかゝわらず、その悪真言の不動、愛染を本門の本尊の須弥壇に引き入れるということは、伝教大師の法華経の山へ、慈覚、知証が真言をとり入れたのと同じことではないか。しかもこの大誇法が今なお本宗の山々寺々に於て、公然と行われているということは、まことにおそるべきことである。真言は影の身にそう如く正法を蔑ばんでいる。善神あれば、悪神これにともなうとは、このことではなかろうか。この二明王の悪封印をとかない限り、宗門の発展興隆はありえない。

山川智応氏は、その師である田中居士の教学を継承して、この二個の梵字を不動、愛染とみとめている。

「日蓮聖人研究」に、

「金胎両部の主たる明王（金剛が愛染、胎蔵が不動）を勧請せられたのは、真言を法華経の一方便として用いられたもの」

という解釈をくだしている。しかし不動、愛染の勧請が、どうして法華経の一方便になるのか頭の悪い私にはよくのみこめない。あるいは大曼ダ羅中に、金胎両部のあばれ者の二明王をひきとらえ、所謂開会して本化の超勝を示すという意味なのかも知れない。しかしそれならば第六天魔王などと同列にあつかうべきでわざわざ四天王宮を貫くような大梵字であらわす必要がどこにあろうか。

大聖人の御真筆と称される（私は実物を拝していないので真偽については語る資格がない）大曼ダ羅の中には、金胎両部の大日如来を勧請されたものもある。しかしこれは「法華取要鈔」に両部の大日は宝塔品の多宝如来の左右の脇士という言葉もあるので、一応考えられないこともない。

ところで不動、愛染は大日如来の眷属、あるいは教令身といわれるから、それよりもはるかに小さく末座の隅にいなければならない筈である。結局どんな角度

からみても、この二個の梵字は不動、愛染ではないのである。これはまぎれもなく唵と吽の二字である。日高師が言うところの法体である。

印度ではこの唵、吽の二字は陀羅尼に冠する神聖な言葉として尊重される。多くの陀羅尼は唵ではじまり吽でおわる。大聖人の「開目鈔」上巻の末尾に出てくる南天竺の法華経の肝心の真言の中でも、唵、吽の二字がある。この唵、吽は宇宙をつらぬく南無妙法蓮華経の力をあらわしたものである。

「新訳法華経」（岩波文庫）の訳者岩本裕氏は「仏教入門」の一八五頁で真言に言及して、ネパール山中の各所にきざみこまれているオンマニペメフムの七字の陀羅尼についてのべている。

「ヨーロッパの学者は〝オーム蓮華の中の宝珠よフーム〟と訳している。オームとフームは神聖な語として陀羅尼の前後につけられるものであるから、訳しようがない。それに、これは起源的には呼吸をととのえるときの、息の音の擬声音である」

いずれにしてもこの唵、吽は陀羅尼とは切り離すことの出来ない神秘な音声と解される。それをことさらに不動、愛染の種子とみなして木絵に造立することは大きなあやまりである。

話はまた元へもどるが、岩間部長を囲んで、二個の梵字の論議がやかましくなつた時、岩間師がふと思い出したように

「そう言えば、最近身延におまいりに来た有名な梵語学者（名前は失念してしまつた）も、あれは不動、愛染の種子ではなく、阿、吽であろうと言つていた」

と話された。若しそうだとすれば、この二個の梵字の性格がさらにはつきりする。といつても私のような梵語に無学なものには、運点のあるあの右がわの梵字を阿字と判じることはとうてい出来ない。もつとも梵字には幾通りにも書きようがあつて、口伝や秘伝になつているようだから、阿字にあのような書き方がない

とは言われない。開目鈔の法華真言にも阿字は重要な意味をもつている。それにしても阿とよむことは無理である。やはり唵である。しかしこの唵の一字には阿字が含まれ、阿字と同じはたらきをすると言われている。そういう意味での阿、吽というのであれば筋が通ると思う。

今かりにこの唵、吽すなわち阿、吽を人格化（形像化）するとすれば、それは二王尊以外にない。二王尊は釈尊のもつとも忠実な守護神であり、しかも密教の汚染を全く受けていない。その百象の力にもまさる大力神の体内からほどばしる阿、吽の音声はまさに四天王宮をつらぬき、尽十方にまでなりひびくであろう。私はそうした大力神の偉大な音声を空想するだけでもうれしくなる。それは破天荒な法華経の虚空会にもふさわしい。壮重で明朗、しかも大らかである。私は法華経の三門には二王尊が一番よく似わうと思う。

日本では弘法大師が唐から密教を持ちこむ前に、すでに密教のピールスがはいりこんでいる。天平八年、ボダイセンナという婆羅門僧が印度からやつて来て、行基や良弁を押しのけ、その頃ようやくにして出来あがつた大仏の開眼をしている。これはおどろくべきことである。日本の国力をかたむけ、八回も改鋳してつくつた大仏には、仏の魂がはいらず、密教の魔性がはいつたのである。そこに密教のおそろしさがある。大聖人は「木絵二像開眼の事」（真蹟中山聖教殿）のなかに、

「今真言を以て日本の仏を供養すれば、鬼入りて人の命を奪ふ。鬼を奪命者と云ふ。魔入りて功徳を奪ふ。魔をば奪功徳者と云ふ。鬼をあがむる故に今生には国を亡す」

とのべている。ここで供養というのは開眼供養のことである。はたせるかな、ボダイセンナはかの道鏡に密教の秘法を教え、道鏡は日本の国を亡ぼそうとした七世紀に印度に起つた密教は忽ちに印度、中国の仏法

を亡し、そして三段飛びで日本へやつていた。その期間がわずか百年である。一方、法経経、維摩、華厳、ネ槃等の顕教は西域をまわつて三世紀に中国に入り、わが国には六世紀、欽明天皇の御代に金色の釈尊像とともにつたわつた。その間、少くとも五、六百年の歳月をついやしている。

二王尊はその五、六百年の間、つねに釈尊の護衛神として、印度の古代仏跡から、西域、中国と、その流伝の径路にしたがつて造立され、わが国にも仏教とほとんど同時につたわつている。二王尊が密教の汚染を受けていないというのは、このことを指している。

現在、日本で最古と言われる二王尊は、大和長谷寺につたわる法華説相会の銅板（美術の方では千仏多宝仏塔板と呼んでいる）の中の二王尊である。この銅板は釈迦、多宝の坐す宝塔を中心にして、十方界の諸仏がこれを囲繞する様をあらわしたものである。つまり日本に於ける最古の法華曼ダ羅である。造立は文武二年といわれている。この曼ダ羅の下辺の左右に、力感あふるるばかりの阿、吽の姿が浮彫りにされている。しかもこの曼ダ羅中の諸尊の中で一番大きい。このことは曼ダ羅の二個の梵字のもつ意味と何か一連のものを感じさせる。また法華経と二王尊の深重の結縁もこれによつてうかがうことが出来る。

また立体像としては法隆寺中門の二王尊が最古と称されている。ところがこの法隆寺の中門には古来いろ〳〵に論議された一つの不思議がある。それは四間の中門の中央に建築上全く必要のない柱が一本立つている。浅野清氏はこれを、

「外観をととのえる上から生じた偶然」

とみている。しかしそれでは説明にならない。精密な設計によつて組立てられる重要建造物の正面に、余計な柱が一本偶然に出来るということは考えられないことだ。これには何か深いわけがある。建築学や美学の問題ではないと思う。

その柱について、以下私ののべることは、秋田市御船町の鹿島宮に秘蔵されている十羅刹女のお面の霊告によるものである。

日蓮大聖人は比叡山遊学中に法隆寺に詣で、この中門の前で不思議な霊感を得られた。大聖人が中門を仰いで、胡跪し合掌礼拝された時、その中央の柱から金色の光明が立ち、南無妙法蓮華経の七字となつてあらわれた。大聖人はその場にひれ伏して、その妙法五字を袖に押しいただいた。つまりその中央の柱は妙法蓮華経そのものであり、それを阿、吽の尊形が左右に守護しているのである。大聖人の曼ダ羅の綱格はこのようにして生れたのである。

法隆寺は太子の死後、その菩提をとむらうために創建されたというが、事実は太子の生前の発願によるものだという。そこには太子の面影をしのばせるような眉目秀麗の釈尊像が本尊としてまつられ、薬王、薬上の二菩薩が脇士として仕え、須弥坦の四方には四天王が護衛している。

太子は生前、仏法興隆をもつて安国の理想とされ、自ら勝鬘経、維摩経、法、法華経の三経の義疏をあらわされている。しかもこの三経のうち一番に最後にあらわされた法華経にもつとも重きをおかれている。駒沢大学教授大野達之助氏は「日本仏教思想史」において、三経の価値を論じ、

「太子は三経を平等に観ていたのではなく、その間に深浅主傍の差を認められていたのである。そしてその価値の差は、製疏の順序と異なり、法華経を最も重く観られたようである」

とのべ、詳細にその事由をあげている。また有名な「世間虚仮唯仏是真」のところでは、

「唯仏是真とは、無常なる世間に対して真実なるものは唯だ仏であるという意味で、この場合の仏は釈尊仏陀のことである。太子が仏というとき釈尊を考えていたであろうことは、三経に登場する仏がすべて釈尊で

あることから想像しうるし、また歴史の事実から云つても釈尊が唯一の仏陀と見られてきているので、かく推断するのが当然であろう」

と、太子な純粋な釈尊信仰を力説している。また太子は推古天皇十四年に岡本宮（後の法起寺）に於て、推古天皇はじめ百官のために法華経を講説している。日本で法華経の説かれた最初ではなかろうか。また太子の三宝興隆の詔は太子の立正安国論と言つてもいい

伝説ではあるが、大聖人は比叡山遊学中、磯長にある太子の御廟に参籠している（今その参籠の地に記念の宝塔が建つている）。しかし現存の標準御書による限り、大聖人の遊学中のことは全く不明というより他なく、ただ滅後の御伝記等によつて、諸山諸寺をたずねまわつたことが、それとなしにうかがえる。京に十二年間とどまつて、南都へ足を向けない筈がない。ことに法隆寺は、大聖人の景慕してやまない太子の棲神の霊地である。大聖人がそこで法華経の肝心南無妙法蓮華経の五字を感得されたということはありうべきことである。私は霊告なるが故にそれを信じるのである

しかも有難いことには、この法隆寺中門の二王尊と身延三門の二王尊は、その様式、姿、感じが全く同じである。ともに金剛杵を持つていない。手をこぶしにして肘をひいてふりあげている姿までが似ている。ただ法隆寺のものは、やや下向きに見下した感じだが、身延の方は、顔をやや上向きにしている。この両山の二王尊の姿は、前にのべた長谷寺の銅板の二王尊とも軌を一つにしている。これは単なる偶然とも思われない。法華経の一大事因縁のなすところではなかろうか

身延の二王尊については、中山日祐上人の教化を受けた妙法日荷上人が、相州六浦から二体の尊像を背負つて、一夜で身延山へ運んだという伝説がのこつている。この二王尊は身延山へはいるべくしてはいつたのである。その製作年代は判らないが、法隆寺中門のもつとも古い様式を受けついでおり、その空中をかける

ような姿は秀逸である、身延山の、もつともすぐれた彫刻の一つである。身延山はもとより宗門人であるわれ〳〵は、もつとこの尊像を大事にしなければならない。

大事にするとは、文化財に指定を願うとか、コンクリートの宝物殿にしまいこむとかということでなく、御法味をそなえるということである。最近は三門から御経の聞えて来ることも稀れである。法鼓の音もひびかない。これでは二王尊も神天上されてしまう。

私は三門の中にただずむ時、ここには大香炉をそなえ、つねに名香をともしておくべきだと思う。名香は神霊の飲食である。飲食がなければ、大力の二王尊もはたらきようがないのである。

私の僻目であろうか、最近とくに三門の周囲が雑然としているようである。記念碑とか記念像が立つたわけでもあるまい。緑樹を植えるとか、白砂を敷くとかもう少しどうにかならないものか。神域の感が次第にうすれていくのである。それにつけても、名香をともして、御法味を供えるべきであろう。また香の匂は三門の不浄をはらい、ここを通るわれ〳〵の六根をきめてくれるであろう。はるばる幾山河を越えて来て、この三門からひびく大鼓の音を聞くとき、われわれはいかにも身延山についたという深い感動に打たれるのである。また名香の匂いは、大聖人の間近かなことをわれわれに知らせるであろう。三門は身延全山の玄関である。また俗界と霊界の別れるところである。われわれはおろそかに三門をくぐつてはならない。

さて本論にはいろう。

私の寺の檀徒に、小林妙延という篤信の行者がいる二十五才で法華経の功力を得てから、難病業病の人を救うこと、その数を知らない。とくに狂人をなおすことに霊験があつた。人々はみなこの妙延さんを生き神のようにしたつている。

もうヒコ孫のいるお婆さんだが、頑健な体躯にはい

ささかも衰えかない。頬は赤く張つて皺が見えない。人によつてはこわいという人もあるが、そのきびしい顔立ちには言いようもないいつくしみがある。柔和忍辱の顔である。私はこの人を二王さの婆さんと呼んでいる。

妙延さんの生家は禅宗、嫁いだ先も禅宗、しかもその村は全戸が禅宗である。南秋田郡井川村の籠田というところである。そのため妙延さんに対する反対、迫害は言語に絶するものがあつた。団扇太鼓はなんど捨てられ、なんど破られたか知れない。

しかし妙延さんの初一念はゆるがず、入信してから三十五年目の大聖人立教開宗七百年の記念すべき年、ついに悲願の改宗をなしとげたのである。長い間、妙延さんをいじめぬいて来た人々も、妙延さんの純真な信仰と偉大な霊験をまのあたりにして、かえつて自分達の心をとがめるようになつた。

そして、その年の夏の一日、妙延さんはしたたる汗をふき〳〵私の寺へかけつけて来た。

「改宗させて下さい」

と、そのてんまつを語る妙延さんの眼には、あつい涙が滂沱としてあふれていた。その時の妙延さのよろこびの涙を、その尊さを私は生涯忘れることが出来ない。

妙延さんが四十才の時のことである。その年も暮れようとする頃、妙延さんは当町大手の原田助太郎の家の、気の狂つた忌子（当時十八才）を救うために。一命をかけていた。その男は発作をおこすと、全裸になつてかけまわり、男達が四・五人かかつても、とりおさえることが出来なかつた。妙延さんは幾度もその気違いに蹴倒されたり、髪の毛をふりまわされたりした一時はとても自分の手に負えないと思つた時もあつた

しかし原田家では発作がつづくと、三里もはなれている妙延さんの家へ馬ソリで迎えに来るのである。妙延さんはそれをことはるわけにいかない。もし自分が

尻ごみをするなら、それは法門に泥を塗ることになる

馬ソリに乗り込む時にはいつも死を覚悟の上であつた

旧暦十一月八日、その日も妙延さんは原田家に泊つた。気違いは一晩中あばれ通しであつた。妙延さんは夜半の三時に、かり寝の床に起き、水行の身支度をした。その時、空中から声が聞えて来た。

「身延三門にひきとるぞ」

しかも同じ声が三度ひびいた。

妙延さんはその意味がわからぬまゝに、外へ出て一心に水垢離をとつた。今の声が魔の声であつたなら、どうかそれを払うようにと妙延さんは、心のすむまで水をかぶつた。そして家にはいり、着物をまとつていると、その声がまた聞えて来た。

「お膳二枚とワラジ二足をそろえておがめ」

妙延さんはその声のうながしのままに、

「お膳にはあつい飯と汁をそなえるよう、おかずはあるものでよい、またワラジがなかつたら紙に書いたものでもよい」

と家人に言いつけた。

幸いにワラジは近くの店に売つていた。そして明け方から、供物をととのえ、一心に祈念にはいつた。そのうちに狂人の様子が次第にかわり、しまいには妙延さんのかたわらに坐りてみ、やがて正気にかえつた。

一家のよろこびは言うまでもない。しかし妙延さんには、身延三門の言葉が不思議でならなかつた。身延山と言えば、日蓮聖人のお山である。飛ぶようにして妙延さんの眼にうつつたお姿は、衣をつけた坊さんの姿ではなかつた。三門とはなんだろう。そこにはどんな神様がまつられているのか。妙延さんは車に酔う性質なので、それまで家郷から一歩も外へ出ることがなかつた。しかしその時、妙延さんは身延山へおまいりすることを堅く心にちかつたのである。

ところが、その翌年が大聖人の六百五十遠忌にあたつていた。その年、私の寺では身延団参のくわだてが

あつた。妙延さんはその一員に加わつた。当時身延までは、まる二日を車中ですごさなければならなかつた車の酔もおさまり、妙延さんは一行とともに身延の駅におり、夢にもえがいた身延の山々を眺めた。宿坊へつくと、妙延さんは先ほど教えられた三門へかけつけた。そこには今空中から飛び下りたかのように巨大な二王尊が逞しい足をふんばつていた。

「有難うございました」

と一言いうと、妙延さんの両眼から涙が滝のようにあふれた。

その後、妙延さんは三度身延山・七面山へ登詣した一昨年は私と一緒に、しかも北山本門寺貫主片山日幹上人のしりえにしたがつて、七面山へのぼつた。七十余といえ莫々として七面山へよじのぼる妙延さん元気な姿をみる時、私は後姿をおがみたいほどの気持であつた。

その日は旧暦九月十九日で、日朗菩薩が七面山を開いた日でる。翌朝、私達は四時に二天門の前に出て、富士山頂からのぼる明けの明星を拝した。空には一点の雲もなく、北斗七星が丑寅の上天に輝いていた。秋の彼岸から一ヶ月ぶりの晴天であつた。山務の僧は北山の貫主様が見えられたので空があがつたのでしよう、と言つていた。やがて玲瓏玉のような暁天から、御来光が燦然とあらわれ、全山光明に押しつつまれたその時、妙延さんは私の袖をひいて、

「おもしろくて〳〵」

と、あふれるよろこびに小踊りするのであつた。

私はその純真な姿をみて、創価学会百万の信者よりも、この爪上の一信者を持つことに、宗門の大きな力とほこりを感じた。

なお次号には、今一人の行者、真光院日秀法尼の尊い体験と私の所感などをのべ、二王尊と法華経の関連を、もつと深く掘り下げてみたいと思う

〈つゞく〉

煩悩は消えない

早稲田大学
秋元　忠

信仰を、より正しくつらぬこうとすればするほど、煩悩の罪におのかざるを得ないことは、誰でも体験するところであろうと思います。

また仏陀を仰げば仰ぐほど、自己の罪業をより強く意識したり、強盛に信仰すればするほど、却つて仏陀と自分との距離が、ますます遠く感ぜられると共に、信仰の不安も、より強く感ぜられることは、純粋な信仰者の中には往々にしてありがちのことゝ思います。

私もそうでした。入信は高校の頃からですが、信仰が深くなればなるほど苦悩も深くなり、遂には自己嫌悪に堕ち入つてしまつて、何度信仰をやめてしまおうと思つたか判りません。

仏陀を我が最高の人間理想像と仰いで、近ずこうとすればするほど、却つて仏陀の方が遠くしりぞいてしまうのです。遂には仏陀の影すら見失つてしまつて、曾つて幾度も踏み込んだこともある罪業の泥沼の中に再び堕ち入り、抜き差しも出来ぬ状態に悶えたことも再参ではありませんでした。

そして一所懸命あがけばあがくほど、私の唱えるお題目は、あたかも曠野の絶叫にも等しいものがあつたことでしよう。

その頃の私の信仰は、理想主義にもえて罪障を消滅し、煩悩を断絶して、菩提の仏果を証得しよう

としていたのです。

これは大へんなあやまりでしたあやまりであると気付いたのは、自分自身では到底、罪障は消滅しきれるものではない、煩悩は断絶出来るものではない、と思い当つた時です。かの抜き差しも出来ない泥沼の中で、進むことも立つておることも出来ず、やけくそになつて罪悪煩悩の泥沼の中に、どつかりと坐り込んでしまつて、求道の一念を放下した時です。

真心の妙道は
悟りて知るべき法ならじ
修すべし求むべからず

という言葉がありますが、この「求むべからず」という禁句は何と力強いことでしよう。そうです求むべからざるものを求めて得られず、求める心自体を放下せざるを得なくて放下したその時、私の悩理にひらめいたものは、仏陀でさえ煩悩を断絶してはおられないという事実でした。

思えば十界互具の理は、仏界の中にもいえることであり、仏界の中にも、なお地獄・餓鬼・畜生・修羅という三悪四悪すらあつたのです。

仏陀は煩悩業苦の六道を断絶せず、これらのすべてを持たれたまゝ、これを見事に調御して仏身を成就されていたのです。

そう思つた時、これまで隠え苦しんでいた自分自身の罪障煩悩なるものが、実は、そのまゝ仏陀の体中に調御されてあるのを感じました。求めあぐんでいた菩提は、実は既に仏陀の中に完成されていたのです。

要するに私自身は、仏陀とは異質のものではなく、全く同質のものであり、実は久遠の昔から、仏陀の体中にあつたことを知つたのです。

いな、同質であればこそ仏陀は悟道の上から私達すべての人々を「悉くこれ吾が子なり」と思い、「我れ一人のみ能く救護をなす」と哀愍されていたのです。

「煩悩の氷とけて菩提水」

という諺がありますが、氷がとけて水となるように、煩悩が菩提となるのではなく、氷は氷、水は水、煩悩は永遠に煩悩であり、菩提もまた永遠に菩提なのです。

しかも氷といゝ水といゝ、全く両者同質である如く、煩悩と菩提とは表裏相即するものであり、煩悩と菩提とを天地に隔別するところに迷いがあるのでしよう。

煩悩をすて、菩提があるのではなく、菩提を放れて煩悩があるのでもなく、煩悩を調御するところに菩提が現われ、菩提の現れたところに煩悩が調御されているのです。仏陀は、この調御を見事に果した私達の主師親と仰ぐ理想像であつたのです。

それ以来、私は深重なる罪障を懺悔こそすれ、その消滅を願わず無尽なる煩悩を懺悔こそすれ、その断絶を願わず、過去遠々劫来の罪悪深重なる身のまゝ、これを怨す仏陀を、常に身近かに感じながら歓喜の信行をつゞけています。未来成仏の授記も、この中にあると信じます。これ以上、更に何をか求めるものがありましよう。既に私は本仏釈尊の仏子として生かされているのですから、そして他の人々の上にも、同質の仏子としての親しみを覚え、有縁無縁の霊にも供養をつゞけているのですから。

〈おわり〉

台風お見舞

今夏、各地をおそつた打ちつづく台風の災害を、心からお見舞い申上げます。

山梨県も戦後未曽有の被害をうけましたが、身延の本山も本妙庵も、参道の崩壊を除けば、建物には何の被害もありませんでした。

各地よりのお見舞いに対し、厚くお礼申上げると共に、災害地の復旧の一日も早からんことを、心よりお祈り申上げます。

鷲峰会

信仰相談室

何故読経唱題をくりかえすのか

解説　日高白象

おたずね

お経やお題目が至極有難いものであるならば、なおさらのこと、一通り読めばよさそうなものなのに、自我偶の如きは何辺も何辺も繰り返し繰り返して読んでいますし、またお題目にしても十辺ばかり唱えさえすれば、それでよさそうなものなのに、何百辺も何千辺も繰り返し繰り返して唱えることがナラワシとなつているようですが、これには一体どういう訳があるのでしようか。

「読書百辺、意おのずから通ず」というコトワザはありますが、チンプンカンプン訳もわからない漢文の棒読みを、何万辺やつてみたところで、せい〳〵読み方が早くなり、それを自慢の種とするくらいがオチで、意味はチツトモ判ろうはずはありません。

また大抵の人々は、お経やお題目を沢山となえた方が、御利益も多いと思い込でいるようですが、然しそんな考えでは、信仰そのものが「かけひき」になつてしまうのではないでしようか

おこたえ

お経の漢文の棒読み、これを通常「真読」といゝ和文読みを「訓読」と申しています。

さて真読は、古い昔から踏襲さ

れて来た読経形式ですが、昔は、お経に限らず一般社会においても和文よりも漢文の方が尊重されており、漢文に強かつた当時の人々は、お経を真読しながらも訓読の場合と同じように、お経の意味を理解することが出来ていたのですのみならず真読の方が訓読よりも遙かに速く読むことが出来るし、また神秘的な音律もともなうところから、真読形式の方が主として用いられ、その形式がそのまゝ今日まで伝つて来たのでした。

ところが今日の人々では、殆ど漢文の素養がありません。従つてお経の意味も全然わからないまゝまるで呪文でも唱えるかのように真読形式を踏襲しているにすぎません。

〈これではいけない〉というので最近では訓読ばかりを用いたり、訓読を主として用いたりする傾向が生じて来ました。まことに結構な傾向です。然し、こゝに注意しておかねばならないことがあります。

それは、真読の場合であつても訓読の場合であつても、いやしくもお経が法華経である以上、

要を以つてこれを言わば
如来の一切の所有の法
如来の一切の自在の神力
如来の一切の秘要の蔵
如来の一切の甚深の事
皆この経において
宣示顕説す

と本仏釈尊みずから如来神力品の中で明示されている通り、単なる物語りでもなければ、教理を述べたものでもないということです

またお題目にしても大聖人みずから観心本尊鈔の中に、

釈尊の因行果徳の二法は
妙法蓮華経の五字に具足す
我等この五字を受持すれば
自然に彼の因果の功徳を
譲り与え給う

と指南され、四信五品鈔の中にも、

妙法蓮華経の五字は

経文にあらず
その義にあらず
たゞ一部のこゝろのみ
初心の行者
その心を知らざれども
而もこれを行ずるに
自然にこゝろに当るなり

と明示されている通り、お題目とは「一部のこゝろ」即ち一部八巻二十八品の法華経に顕現し尽された本仏釈尊の自内証のすべて、その因果の功徳体であり、血肉にほかならないのです。

従つて先師も、

「信得すべし。識得すべからず」

と強くいましめられているわけですが、いやしくも読経唱題にあたつては、

〈法華経というものは、こういうものである〉
〈お題目というものは、こういうものである〉

ということを絶対信受してかゝらねばなりません。則ち読経唱題の行を立てる上には、この絶対信が基盤となるのです。

従つて、お経を訓読する場合、この信なくして、如何にお経の意味を理解しようとしても、凡夫の相対的浅識では不可能なことであり、むしろチンプンカンプンな真読であつても、信をもつてするならば、その方が遙かに勝れていると申せましよう。

もとより、この信をもつて一々文々、味をかみしめながら訓読することが、最もよいことには相違ありません。

然しながら、真訓いずれにしても、この信をもつてする限り、価値に勝劣はないということは留意すべきでありましよう。

考えても御覧なさい。

私たちの読経唱題を聞いておられる本仏釈尊にしても、日蓮大聖人をはじめ諸天善神にしても、真訓両読自由自在、法華経と一体不二であられるのです。そして、たとえ拙ない私達の読経唱題ではあつても、私達の信如何によつて、これを受けとつておられるのです

た。

旅僧は愕然とし且つ恐怖して言つた「女犯は堕地獄ですゝ」と。娘は「婆々様のいゝつけですからそむくと私が叱られます」と哀願した。旅僧は顔も引きつるようにして娘を部屋から追い出した。

娘は静かに部屋を去つた。そしてこの由を老婆に告げた。すると老婆は庭の箒をもつて旅僧の前に立ちはだかり、はつしとばかり肩をなぐりつけて叱咤した。

「この生兵法者、修行して出直して来い」

それから幾年か過ぎた。旅僧は老婆の一喝を胸に刻んで懸命の修行を重ねた。そして再び荒野の中の一軒屋の前に立つた。

老婆と娘が静かに出迎えた。旅僧は以前と同じ離れの部屋に案内された。旅僧は今度も数日こゝに留つた。看経三昧、一歩も外へ出ないことも前と同じであり、娘が三度の食膳を運んだのも変りはなかつた。然し、さげる食膳の上の魚類はきれいに食べられていた。

そして、いよ〳〵明日が出立つという晩が来た。娘は再び老婆から夜伽に出るように命ぜられた。娘は静かに庭を横切つて離れへ入り、旅僧の前でこの由を伝えた。旅僧は娘の手を引きよせ、ふくよかな体を抱いた。

と、その時、ガラリツと障子があいた。老婆が憤怒の行相も物凄く踊り込み、箒で旅僧の頭を滅多うちに打ちすえて叫んだ。

「みそこなつた、この妻坊主。出て行け、二度と姿を現わすなッ」

旅僧が去つた後、老婆は家に火をかけた。

「幾歳月、待つたことも無駄だつた。もうこの家にも用はない」

農家の燃ゆるホムラが、荒野の闇夜をアカネ色にそめていたという。

日高上人のお話しは終りました

そして、

「おい、どうだ。お前たちがこの旅僧と同じ立場に立つたら、どう

する？娘は絶世の美人だぞ。気立てもいゝ、しつけもいゝ。しかも老婆の指示まで受けている。然し娘を抱いても喝棒三十、だかなくても喝棒三十。さあ、一体どちらをとる」

僕たち学生は顔を見合せました一人がいゝました。

「すえ膳を食わぬは男の恥、どうせ叩かれるなら抱いた方がいゝ」

皆どつと大笑いしました。また一人がいゝました。

「僕だつたら、こういう。おい娘さん、チョイト待て、婆さんを立ちあわせ、三人でよく話しをしてから、抱くことにする」

この解答も大笑いでした。日高上人は、「まあ、よく考えてみるんだナ」といつて席を立たれました。

それから数日して、

「どうだ、腹は決つたか。抱くかい、抱かぬかい」

と、再びうながされました。もとより僕たちには腹の決めようもありません。すると日高上人は、

「いくじのない者ばかりだな。相手は老婆と娘、女二人だけなんだぞ。女に手をついてあやまるか」

とからかいながら、

「前に旅僧が老婆から叩かれたのは、旅僧が小乗的な始覚法門にとらわれていたからだ。また後で叩かれたのは観心ずわりの自然主義的本覚法門に堕していたからだ。老婆も娘も此の両極を断破しようとした善知識。法華経の法門はこれ以外にある。さてその実践はどうすればよいのかな」

と更につめよられました。僕たちはいよ〳〵窮してしまいました額と脇の下から冷汗がにじむ思いでした。一人がたまりかねて思わず合掌し、

「手をあわせて南無妙法蓮華経といゝます」

と、どなりました。日高上人はニタリト妙な笑いをされました。

編集後記

★十月といえば御会式、今年は身延から池上へ参拝した。夜店と参拝の人垣は池上駅から本門寺へ、そして新装の大本堂周辺へとつらなつてごつた返していた。立正交正会の万灯行列も二ギ〳〵しかつた。然し何かが狂つている。何もかも狂つているのかも知れない。大聖人のダ毘塔に詣でる人は殆どなく、日朗上人の南ノ窪の遺跡には更に人影すらなかつた★大聖人滅後の当時、日朗上人は南ノ窪から、今にし残る日朗坂を登り、後年本門寺となつた原始林の台地をなつてダ毘所へ日参されていた。その頃の日蓮門下の中には立正安国・国家諫暁の運動は火と吹いていた★然しその火も何時しか消え、原始林は開かれて大門寺の伽藍がそびえた。江戸幕府の時代のことである。そのいまわしき残映が今にも残つている。狂える人々は残映を求めて踊る。今日の御会式の中には大聖人が滅後に托した祈りの片鱗もない★大聖人六十一年の一期は法華経の色読であつた。法華経の色読とは本仏釈尊のいのちに生きることである。「日蓮この土にあらずんば釈尊の金言は虚妄に帰す」というその直言は、上増慢のそれに非らず、親の真実の命に生きぬいた子の絶叫に怪かならない。

＜白＞

鷲峰 十月号

昭和四十一年 第四巻 第五号
通巻 第三十号

定価 五十円 送料 二十五円

昭和四十一年十月五日 印刷
昭和四十一年十月十日 発行

編集兼発行人 山梨県身延町波木井三区醍醐本妙庵 日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平 藤田印刷所

発行事務所 山梨県身延町波木井三区四二二五 鷲峰会

電話（身延山）四五九番
振替（甲府）二〇九三番

誌代 半年分 四五〇円（送料共）
一年分 九〇〇円（送料共）

賛助会費 一年分 三〇〇〇円（分納可）